★　操　作　方　法　★

ページの上でクリックすると次のページを表示します。右クリックすると前のページに戻ります。
※ Macintosh で、マウスに右クリックの設定をしていない方は、キーボードの「control」キーを押しながらマウスをクリックすると前のページに戻ります。
※ iPad では、上下スクロールでご覧いただけます。

つれづれ
インタビュー
マンガびと
9

おだ辰夫

神保町・ギャラリーf分の1で開催された林氏の写真展のミニコンサートでウクレレ演奏を披露するおだ氏

プロフィール
1952年この世に誕生。赤ちゃんなのに腹部が黒かった。腹黒い性格はその頃からだったらしい。腹は黒いが、肝はすわっていなかったとか。高校時代、マンガ同人誌「つれづれ草」に参加。大和田夏希、高岡凡太郎、かたおか徹治などと親交を深める。成長して大学の教養学部と外国語学校の中国科と朝鮮語科を卒業した。自動車学校も卒業している。二輪は400ccまで乗れる免許だが愛車は90ccのスーパーカブ。少林寺拳法は黒帯だが、腕っぷしは滅法弱い。

転校の多い子供時代 なぜか自分だけが漫画が上手かった

出身は広島です。うちは転勤族だったので、県内をあちこち移り住んでいました。

父親ですか？　獣医だったんです。といっても病院に勤めていたわけではなくて、広島の地方公務員でした。つまり公営の競馬場や牧場で、牛や馬の病気を診たりしていました。保健所管轄の職員になるのかな。実際、父親がどういう仕事をしているのか見たことはなかったんだけど、牧場に行った帰りは、乳製品のおみやげをいっぱいもらってきました。家には牛や馬の医学書や図鑑がありましたよ。ちなみに牛って指紋じゃなくて鼻紋なんです。その鼻紋の本があったりとかね。そういうものがほかの家にもあるもんだと思っていたけど、うちだけでした。あとやたらに牛

や馬のクスリがあったんです。怪我をしたらふつう赤チンをつけるんだけど、うちでは馬のクスリをつけとけって(笑)。なんか真っ黒な粉みたいなクスリでした。そんな家庭というか。母親は専業主婦。あと年が3つ離れた弟の4人家族でした。

転校は多かったですね。新しい学校に行くと、同じように転校してきた子とか、クラスでなんとなく浮いているような子と友だちになったりしていましたね。そうした奴とはいまだに交流があったりします。もう50年のつき合いになるのかな。

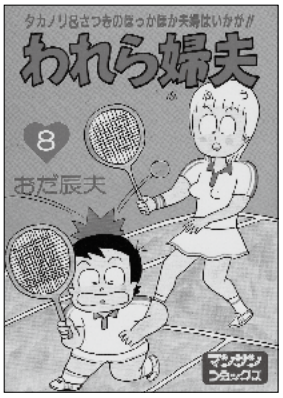
もちろん漫画は好きでしたよ。でもあの頃の子供はみんな漫画が好きだったし、同じぐらい野球も好きだったからね。近所の子たちと草っぱらでよく野球をやっていました。まあほんとに普通の子供でしたね。

最初に夢中になった漫画は横山光輝さんの『伊賀の影丸』です。自分で忍者を創作してノートに描いたりしていましたよ。それは僕だけじゃなくて、まわりの子はみんなそうだった。あれは雨の日だったかな。友だちの家にみんなで集まって漫画を描いていたことがあったんです。すると、みんな下手なんですよ(笑)。みんなに「上手いじゃない、描いてよ」と言われて。そんなことがあって、ひょっとしたら自分は漫画が上手いかもと思うようになりました。今思うとそれが誤解の始まりかもしれないけどね(笑)。それは小学校4年ぐらいのときだったかな。図画工作の授業も好きだったし、学校の壁新聞にも漫画を連載したりしてね。どんな漫画かは忘れたけど、タイトルだけは覚えています。『へっぽこくん』。4コマ漫画です。

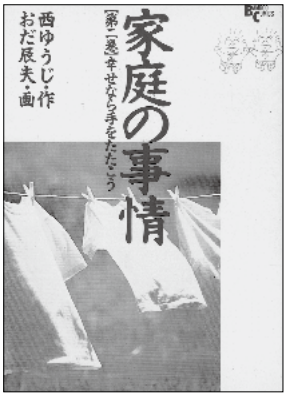
本格的に漫画を描き始めたのは中学に入ってからです。その頃、手塚治虫さんの「マンガの描き方」とい

う本が出て、漫画というのはこういうふうに描くのかと思いました。ペンや墨汁の使い方とか。原寸の1・2倍で描くとか。消しゴムのカスを取るのは羽ぼうきがいいとか。まあなんでもいいんだけどね(笑)。そういった技術的なものは手塚さんの本で学んだけど、精神的なものはなんといっても石ノ森章太郎さんの「マンガ家入門」。あの本があったからこそ、この「つれづれ草」のような同人誌を作ったんです。ものすごいショックを受けましたね。いままで一人で漫画を描いてきたのに、仲間で集まって描くこともできるんだと。

『まんが日本の歴史人物事典』
シナリオ・小西聖一
まんが・おだ辰夫　小学館刊



『われら婦夫』
おだ辰夫著　実業の日本社刊



『家庭の事情』
作・西ゆうじ　画・おだ辰夫　竹書房刊

投稿仲間を頼って上京「ジャンプ」で佳作入選してデビュー

中学の頃から漫画雑誌に投稿するようになりました。同じ投稿仲間として、かたおか徹治くんや高岡凡太郎さん(二人とも本誌2号にインタビュー掲載)と知り合って親しくなりました。そのときすでに新宅よしみつさん(同3号にインタビュー掲載)はかなりの有名人で、あちこちの雑誌に投稿作品が載っていて、すごいなと。昔の漫画雑誌は、投稿で載った人の住所が載っていましたから、それで新宅さんともつながりができたんです。そしたら、彼が高校を中退して、井上サトルさんのアシスタントになったんですよ。自分の知っている人

が、プロの漫画家とつながったことに驚いたし、そういう道があるのかと。

だから新宅さんの影響は大きかった。彼がいなかったら「つれづれ草」もなかったし、いま、こういうインタビューを受けていることもない。獣医になっていたかもしれませんよ(笑)。

高校2年の夏休みに上京して、新宅さんのところに遊びに行きました。「つれづれ草」に参加するようになったのもその頃でしたね。新宅さんは梅本さちおさんのところでアシスタントをしていたので、連れていってもらったんです。実はそのとき、「少年ジャンプ」の新人賞に作品を応募していたんですよ。そのことを梅本さんに言ったら、編集部に連絡してくれてね。「こういう子が応募したっていうんだけど、どうなってる?」って。そしたら佳作に入っているというんです。まだ発表前なのにびっくりしちゃって(笑)。

その佳作がデビュー作です。タイトルは『フクメンくん』。ギャグ漫画です。それで「ジャンプ」と専属契約をしました。担当編集者がついて、毎月お金をくれました。2万円か3万円だったと記憶しているけど、特に何本描かなければならないというノルマはなくてね。でも、「ジャンプ」って「友情、努力、勝利」じゃないですか。どうも合わなくてね。実は「少年サンデー」のほうが好きだったので、そっちの方でも描いていました。「ジャンプ」と契約していたから他誌では描くのは駄目だったのだけど、「サンデー」では漫画の欄外にミニ漫画のスペースがあって、それを描いていました。ちゃんとした漫画とは言えないから大丈夫だと思ってね。

そのミニ漫画を描くように勧めてくれたのが「サン

デー」の林洋一郎さんという編集者でした。もともと漫画家志望で石森さんのところでアシスタントをして経歴の持ち主でした。彼とは漫画の話でよく盛り上がりましたね。漫画の好きな先輩と後輩同志という感じでした。最終的には「ビッグコミックオリジナル」の副編集長になった人で、僕にとっては恩人です。新宅さんと林さん。これが僕という漫画家を作り上げてくれました。「サンデー」と並行して、何作か「ジャンプ」で描きながら、なんとか高校は卒業しようと思っていたので、出席日数ギリギリで卒業しました。そして上京するわけです。

アシスタント経験なしでプロに漫画はコマ割りとフキ出しが重要

上京するとき、特に親は反対しませんでした。半ば諦めていたのかな。でもすでにある程度お金はあったから、上京してもなんとかなるだろうと思っていました。広島ではずっと一人で漫画を描いていたから、同じ年頃の漫画家の仲間が欲しかった。大和田夏希(『タフネス大地』などの作品で活躍。「つれづれ草」にも参加。94年没)くんとかが東京にいたしね。

アシスタントになるということも考えませんでした。というのも実は高校生のとき、かたおか徹治くんが山上たつひこさんのアシスタントをしていたので、遊びに行ったんですよ。そこで手伝わされたんだけど、集中線や模様が描けなくてね(笑)。あとでか

ODAMANGA.com
(オダマンガ . コム)
http://odamanga.com/

ブログ・オダンディズム
http://o-dandyism.
blogspot.com/

ブログ・oDadaism
http://odadaism.
blogspot.com/

たおかくんが切り貼りで直したらしいです。その一件以来、自分はアシスタントには向かないから、なんとか一人でやっていかなければと思っていました。

「少年ジャンプ」や「月刊ジャンプ」で読み切りのギャグ漫画を何本か描いたあと、契約が切れたから、そのあとは「少年サンデー」や学年誌、あと「てれびくん」とか、小学館の学年誌等で描くようになりました。

基本的にずっとギャグ漫画です。ギャグを考えるのは大変？　いやそんなことはなかったかな。ギャグを考えるのは好きですよ。頭の中ではもっと面白いことを考えているんだけど、実際に漫画にするときに、変にブレーキがかかって無難なものを描いてしまう。それはいまだにありますね。ここまで描くと駄目だというものが自分の中にあるんでしょう。なんとも難しいところだけど、ブレーキがかかっているからこそ、仕事が来たんじゃないかと思うこともあります。

自分なりに漫画というものを研究したことがあるんです。それで、漫画でいちばん大事なものは、絵じゃなくてコマ割りだと気づいたんです。というのも漫画の枠線だけをトレースしたことがあってね。すると皆さんコマ割りが違うんですよ。枠線を見ただけで、これは誰の漫画かわかるんです。ここに漫画の秘密があるんじゃないかと。森田拳次さんの枠線は本当にわかりやすいコマ割りでしたし、横山光輝さんは定型のコマしか使っていない。赤塚不二夫さんは横長のコマが多いんですよ。縦長のコマはほとんどなかったなあ。枠線は漫画のリズムと流れを決めるんです。それがぎこちないと中に絵がうまく入りません。

あとフキ出しの尻尾が気になっていて。僕が好きなのは、つのだじろうさんの尻尾。あの四角いやつです。

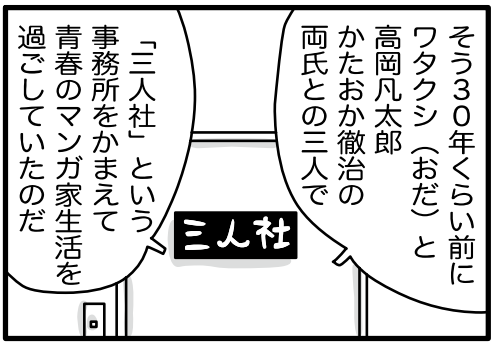
最近の漫画家さんが描くフキ出しには尻尾がないよね。滅びゆく文化なのかな。漫画は枠線とフキ出しの尻尾が重要なのに。

4コマ漫画ブームを経て現在は1コマ漫画に熱中

20代半ばの頃、かたおかくんと高岡くんの3人で事務所を構えました。なんか会社ごっこみたいなことをしたくてね。事務所の名まえは「三人社」。そのまですね(笑)。高岡さんとは合作もしましたよ。当時、ミグ21というソ連の戦闘機が北海道に不時着したよね。それにちなんで「ギャグ21」っていうペンネームを作ったりして。

ただ、だんだん事務所に行かなくなっちゃってね。借りてから2年後の更新のときに引き払いました。ちょっとさびしい終わり方だったかな。

青春の日々



僕は4コマ漫画を描くのが好きだったんです。でも20代の頃は、もうすでに死に絶えたジャンルになっていたんですよ。でも、いしいひさいちさんとか植田まさしさんとか、80年代になって4コマのブームが巻き起こって、そこで芳文社や竹書房などの青年誌に移行しました。基本的にはそんなに無理をしないで描いてきたかな。実は高岡さんからそれを学んだんです。彼はプロレスが好きで、仕事があってもプロレスを優先させていましたからね。ちゃんと断るんですよ。潔いですね。だからなんでもかんでも仕事を受けちゃいけないと思いました。

僕の場合、月産１００枚ということもあったけど、何年も続かないしね。仕事を断るのが怖い漫画家さんもいて、全部引き受けていましたね。仕事が途切れることに耐え切れないというか。そういう人は死にましたよ。ほんと。

漫画家生活も40年を越えました。ずっと続けていける秘訣ですか？　うーん。描き続けるしかないんじゃないですか。やめたらそこで終わりです。僕はたまたまプロの漫画家になれたけど、もしならなかったとしても漫画を描いていたと思う。

漫画は一人で描けるのが強みだし、ペンと紙と机があればできちゃう。今はインターネットがあるから発表の場もあるし、コミケもある。漫画家にとってはいい環境がそろっていると思います。

代表作ですか？　まあネスクトワンと言っておきましょう(笑)。まだまだ描きますから。いまは1コマ漫画を描いているんですよ。すごく楽しくてね。なんとか千本描けないかなと思っています。それが代表作になるのかな。それにしても、ふつうの漫画から4コマ、1コマとだんだん単純化しているというか。その先は絵巻物がいいかも。もし僕が昔の時代に生きていた

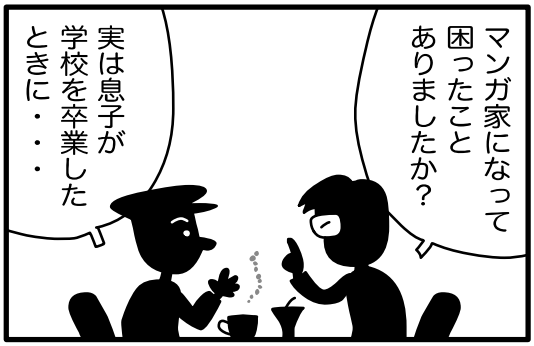
ら、きっと絵巻物を描いていたと思いますよ。

●インタビューを終えて

デビューして40年余り。ずっと現役で、しかもまだまだ描きたいことがあって、意欲満々のおだ辰夫さん。ずっとプロでやってこれた秘訣を探ろうと思っていましたが、そんな秘訣などなにもないとおださんは言いたげで、漫画が好きならそれでいいんじゃないの、というメッセージを受け取ったような気がします。漫画が好き。その気持ちを抱き続けることができるおださんの偉大さを感じ取ったインタビューでした。

文／中島泰司

2011年5月28日

神保町・古瀬戸にて

まっとうな仕事…？？？